



来館者が参加して内容が充実していく古写真展（南あわじ市立南淡図書館にて）

押入れに眠るアルバムを研究やまちづくりに活かす

博物館資料「古写真」を活用した教育普及・地域支援

「昔はこんな風景がよくあったなあ」「そういえばうちでもこんなことをしていたなあ」—古写真を目の前にすると誰もがタイムスリップして、当時の暮らしぶりを饒舌に語りだす。何気ない日常の写真たちを通して見えてくるのはより具体的な「生活文化」の断片だ。自然環境や街並み、祭りや地域行事など、今となっては変化し失われてしまったそれらを、当時のことを知る方々の「語り」と共に収集することで後世に伝え、これからの地域づくりの役に立たせることができないか。ひとほくでは積極的に古写真を集め、展示し、合わせて情報を収集することで「古写真」を「学術資料」へと高める活動を進めている。

■押入れのアルバム写真が学術資料に

ひとほくの環境計画研究グループでは、「過去の人と自然の関係」を探ることを目的として、兵庫県内で撮影された古い写真「古写真」を収集しています。個人宅の押入れや書棚の片隅に眠っているアルバムにある昭和期の何気ない写真であっても、被写体の人物の背景には、当時の自然環境や街並み、祭りや地域行事などの生活文化が写っており、地域のかつての自然やまちの

姿、暮らしぶりを知る学術的な資料になります。このうち、地域で多くの古写真が得られた場合、撮影場所や年代によって整理し、地域の自然環境や景観の変化を調べる研究に役立てます。また、撮影者や当時を知る住民がご健在である場合、その方々の「記憶」を合わせて記録することで、写真の詳細や写真に関連する当時の生活の様子まで資料として後世へ伝えることができます。このような個人が所有する古写真は、アルバムご

とお借りしてデジタルデータ化して返却し、データの使用許諾をいただいた上で、資料として博物館に登録しています。

■「古写真展」でつながる地域と人

また、地域で収集した古写真はその地域で展示・活用することでその真価を発揮します。何気ない古写真の中に、地域の方が共感できる懐かしさや、地域の外から来た方の再発見があり、古写真を展示して多くの人と共有することは、地域コミュニティの形成やまちづくりの拠点づくりに有効です。例として、ひとほくと協働で地域の「古写真展」を開催する佐用町三河地域では、毎回異なる古写真で昔話に花が咲くことから、7つの集落各所から人が集まって交流が深まるほか、都市部に住むお孫さんが古写真展に合わせて帰って来るなど、ふるさと意識の継承にもつながっていると聞いています。また、展示を続けていることで、住民の方々とひとほくに実習に来た大学生たちが一緒に、古写真にまつわる記憶を地域の古老から聞き取りしたり、古写真と全く同じアングルから現在の写真を撮影して、風景を比較する調査を行うなど、活動の幅が広がりました。

■「古写真」は有効な教育普及素材のひとつ

このような、古写真を地域の未来のまちづくりや風景づくり、環境づくりに活かすひとほくの活動を紹介するため、2016年度夏季の収蔵資料展において、『温古写真大作戦 ～むかしの写真で未来をつむごう～』を開催しました。ひとほくがシンクタンクやまちづくり支援にかかわる県内6地域（円山川・六甲山・姫路市・佐用町・明延・三田市）をクローズアップし、代表的な古写真と古写真にまつわるまちづくりの取り組みを展示で紹介しました。また、ひとほくが普段行っている古写真の①収集、②読み説き、③展示の作業を、①古写真スタンプラリー、②なりきり古写真コーナー、③古写真の参加型展示コーナーという形で、来館者が「作戦」として疑似体験できる参加型企画を行いました。会期中に配架した古写真のスタンプ用紙は、来館者の方々に約4カ月で10,000枚以上を持ち帰っていただけたほか、関連講座として開催した参加型展示イベントやギャラリーイベントには多くの方がご参加いただけるなど、古写真に親しんでいただける機会になったと考えています。

このように古写真は、学術資料として、地域のまちづくりを促進する起爆剤として、博物館の展示や教育普及素材として、欠かすことのできない資料であり、古写真を活用した展示やまちづくり活動を、今後も県内の様々な地域で展開していければと考えています。



古写真を使った集落の建物や土地利用の変化を調べる研究例（山崎,2011より抜粋・引用）



古写真と現在の風景を比較する調査の結果（住民の方と博物館実習生が実施）



1. 地域での古写真比較調査 2. 地域の空き家を活用した古写真展 3. 館内企画展時の地域のブース展示 4. 古写真の顔出しパネルで記念撮影できる展示